

あとがき

わたしの正義は、あなたの正義とは異なります。たとえば、高齢者福祉を充実させるべきか、子どもたちへの支援を手厚くすべきか、そもそも保護「する側」と「される側」といった意識を問い直すべきという正義もあります。そして皮肉なことに、誰もが自身の正義に根差した良き世界を目指すからこそ、互いの正義を重ねる努力を怠ったとたんに摩擦が生じてしまうのです。2014年1月、中京大学のジェンダー論と平和論を担当する講師たちは、合同懇親会／慰労会の席で学問領域を越えてつながることの重要性を語り合いました。「ならば、それを教育現場で実践するためのプラットフォームを創ろう」という金敬黙の提案に賛同した加治宏基と、また2014年春には米国でのサバティカルを終えた風間孝が加わり本書の基本構想を検討しました。

ジェンダー論は、性差別という個と個の関係性から政治・社会を考えることから始まった学問でした。一方の平和論は、政治・社会状況とその形成力学から個の平穏について考察する学問でした。同じ社会問題であっても、この2つの学問領域は異なる方向性から課題や論点を浮き彫りにすることが出来ます。3名の編著者は議論を通じて、問題解決へのアプローチは様々ですが、その多様な正義を重ね得るような複眼的な教養が不可欠だと思ひ至ります。そしてその年の夏に金敬黙研究室に集まり、本書で取り上げた15のテーマを策定しました。

すべての執筆者が名古屋周辺に在住しているわけではなかったため、一堂に会して議論を重ねることは叶いませんでした。しかしながら、ひと月に1回のペースで研究会を開き、もしくはメーリングリストやファイル共有ソフトを活用し、各論考の執筆構想、内容や進捗状況について忌憚のない意見交換を繰り返したため、執筆者間では互いの正義を重ねることに一定の成果が得られたとの自負があります。こうした成果の一端は、ジェンダー論の論考において政治・社会的視点がよりいっそう明確化され、同様に平和論の論考のなかで「個」への眼差しが明示されている点からも、看取できるのではないでしょう

か。

この社会で懸命に生きる人々、とりわけマイノリティや弱者とされる人たちの語らいが無ければ、この書が生まれ得なかったことは、特筆すべき要点です。そして本書を手にする読者が、社会を動かしている人々に“光”を当て、自身もその一員だという“熱”を抱き行動することを願います。本書が、社会問題の解決へ向けた複眼的な教養教育の方向性を示す道標となり、翻って希薄になりつつある文科系学問領域の強みを問い直す一助となれば、執筆者にとってこれ以上ない喜びです。

最後に、厳しい出版事情にあって本書の意義を理解いただき出版を引き受けて下さった法律文化社、また名古屋での研究会にも参加され粘り強く編集作業にあたって下さいました同社の舟木和久氏には、この場を借りてお礼申し上げます。

2016年1月

編著者一同